

三、二癡の徒は高坐に隔肝して頭を掉り、肩を張り机を叩き咳を高くして、吾が日蓮大菩薩は云云と替称え、無難無病安産安穩長寿富榮を得ると説いているが、二癡の伝記をみれば災難だらけで、その徒は貧困の者が多く、白癩、赤癩にかかり、寺には童男童女の墓ばかり多く、どこに利益の証があるのか、ことに数珠、木劍を握り、婦人の手を振らしてその手に狐の術を使っている。この様な諸行は本山の敎命をもって制止すべきである。斯くの如き二癡の徒の敎えを信ずれば無門獄に墮つるであらう。

等の大我の日蓮宗批判の内容は、当時、権実論、本迹論の参究に終始していた本宗の学僧を当惑させ、「宗旨の本義を以て、浄土教学に対応することは十分でなかった。」

ところで大我のこの様な批判内容は、江戸中期頃、真宗の僧によって偽作された『大聖日蓮深秘伝』の影響によるもので、それを如実に示しているものに

二癡之徒闇昧無智不_レ知_二其_一開_二宗之本致_一、乃欲_レ著_二昌宗門_一、種種_二為_二華說_一、雖_二心信_一彌陀、而口_二為_二誹謗_一也。我聞_二身延山久遠寺血脈_一、以_二三南無阿彌陀仏_一、配_二諸經諸仏諸神及六道_一、曰、法華、一大事日蓮相承血脈念仏至極、故常秘不_レ申也。以_二三南無妙法蓮華經_一、為_二三平常行_一、顯_二說宗宗差

別_二故也_一、不_レ顯_二彌陀於言語_一、深秘強_二為_二誹謗_一、須_二心中念_二彌陀_一、吾宗極意以_二彌陀威力_一、成_レ仏得_二道者也_一、故以_二一念彌陀仏即滅無量罪現受比來後生清淨土_一、為_二臨終一大事因緣_一云云

がある。以上は『深秘伝』の「破邪敎正章」、「詠歌口伝章」、「法華秘密血脈ノ事」等の所論を引用したもので、大我の『紫朱論』における日蓮宗批判の系譜は、『深秘伝』の影響にあったと考えるものである。（註は割愛）

「ひたちのゆ」についての一考察

田 久 保 顕 悠

ひたちのゆについて考察するに方り本題は現在迄に先輩諸学者が諸書にとりあげて論述されておられますがそれを又そろとりあげ再々論ずるは愚卒に等しいと定めて御失笑をかうものの如く況んや粗忽の徒輩に於ておやと汗顔の至りでございます。

日蓮聖人とひたちのゆと波木井殿一族の関係

日蓮聖人は竜口そして佐渡三年雪中の御難身延入山九年その前々の御難儀な生活環境に在って生来御頑健と思われる身体をもつてしても蝕まれずにはおかぬものがあつた。

文永十一年平左衛門頼綱との柳営対面第三国諒の後、五月十七日従容として山林に交わるその山身延に、波木井実長の迎えを受けたのであつたが、その頃より瘦せ病に侵かされていたものの様で八幡宮造営事（定一八六七）上野殿母尼御前御返事（定一八九六）等にお見禀けできます。弘安四年年始より病臥なされ次第に悪化、明けて弘安五年春夏と過ぎ秋ともなつた頃の御容態は冬を迎えるには覚束なく周囲が身を案じ入湯をすすめたものと思われ、その年九月八日住みなれた身延を発ち池上へ安着なされたものの様でございます。「畏み申し候、みちのほどべし事候はでいけがみまでつきて候、大事にて候いけるをきうだちにす護せられまいらせ候いて難もなくこれまでにつきて候、やがてかへりまいり候はんずる道にて候へども。所らうのみにて候へば不定なる事も候はんずらん。いづくにて死候とはかをばみのぶさわにせさせ候べく候。又くりかけの御馬はあまりをもしろくをばへ候程に。いつまでも失なふまじく候。ひたちのゆへひかせ候はんと思候がもし人にもぞとられ候はん。又そのほか…… 九月十九日

所らうのあひだはんぎうをくはへず候事恐入候（如上）波木井殿御報でございますが御容態の衰弱疲労顯著で、興師に代筆させ而も判形を加えないからとおことわりの追書もしているのは氣力だけで持っていた様に思われるものです。

大体波木井殿を含めた御書は、弘安年間のもものが四、五通の御消息があるものの如く、御当主実長に宛てたものはこの御報と波木井殿御書があるようでございます。が建治四年南部六郎殿（実長の長男子二郎実継）に宛てた地引御書には一族郎党が出てきております。抑々波木井殿と日蓮聖人の出会いについて触れると、真言とも念佛者とも云われた実長殿は興尊の御化導によるものと云われ、その性行狷介不羈と評する御仁もあり、ともあれ鎌倉期に在つての武士として殺し屋そのものであつてみれば人物評は如何様にてもあれ只謂えるものは、聖人を身延に迎え九ヶ年の間御草庵から始めて地引き、大堂構築そこにお住いをしていただいた事実には変りはないのであります。実長の第二男子実氏はその母（実長の女房）と常陸加倉井（隠井）：一部の方々がひたちのゆと地点を指摘している所に居住したのであります。長男子実継は總領で第二代を継ぎ南朝に与し奥州（岩手県）南部（八戸市辺）に勢力を持ち甲州（山

梨県）波木井郷に本拠をおき、これら波木井（南部）一族は奥州京都に転戦、実継は京六条に於て刎刑に処せられたものの、七代凡そ七十余年勢力を伸張したのであり、その時点でのひたち加倉井は皆様のものの如くあったようでございます。当時奥州南部一族が京畿に進攻するには距離、地形そして散在する敵勢を突破せねばならないし、それを構えながら京、奥州を往来するには海路を用いる以外にはなかったものの如く考察したのは西村直次郎先生であるがそこで中継の役割を果たしたのが、ひたち隠井（カクライ）であったとさせていただきます。

鎌倉期に於ける男子の地位は重視されたが、女子は借り腹と軽視される武家社会習俗であった。太宝律令、養老律令などには男子は

奈良時代：正妻、嫡妻、冷妻、妾：四人妻帯

平安時代：正妻、嫡妻、妾：三人

鎌倉時代：正妻（複数可）、権妻、妾（無限）：無限数

江戸時代：正妻、副妻、権妻：三人

とあり、その時代の習俗的男女の位置を示すものと、小耳に挟んでもよからうと思います。

聖人のゆについてのお考え

ひたちのゆを指摘したという聖人は朝師元祖化道記に『二十五・武州池上の事或記に云く弘安五年壬午九月八日午の刻身延沢を出御有て池上村に着たまひ了んぬ。』でその御行動はここまでであることは定説になっていますが、確かに感情を投入すればおいたわしい容態の聖人を入湯が一番と考えるのは周囲の常識であったでありましょう。別の事ですが、曾て興師と目師が出会った熱海を始め伊豆地方のゆはもとよりのこと、身延を南下すれば暖冬の遠州であることぐらいいは知悉の筈であります。御信念からすれば入湯を目的としたものではなく死期は予知しながらも、尚活動は息まず池上を終焉としたものであったと考察するものであります。

聖人滅後百五十年、江戸時代に入って破邪顕正記五巻、禁断日蓮義十一巻を著わし聖人の御行動、教義等を悪罵した舜統院真迢の狂記に対する応答会通であっても、なくとも、宗我我執からであろうが、なからうが、「ひたちのゆ」の場所がどこであるかは現在迄のところ定かではないのでございます。

とまれ、

『ひたちのゆ』についての見解異同を、粗略に挙げますと、

- 1、平賀本土寺七世日意……常陸三宮の湯を指し、聖人は池上御入滅、
- 2、健抄……下総国塩部の湯を指し、聖人は池上御入滅、
- 3、安国院日講……常陸の湯は教門なり、聖人は池上入滅、
- 4、延山三十二世智寂日省……下野国塩原の湯を指し、中風によし、聖人はそこに入湯三日、帰路宇津宮(今の栃木県)に宿す(これは聖人を入湯させています。)
- 5、延山三十六世六牙潮師……日省と同じ下って姉崎正治……下野国那須又は塩原の湯か、岡 教選……常陸加倉井井上恵宏……常陸加倉井の湯か、今の妙徳寺境内の中にあると云うか、堀 日享……常陸加倉井にありとの説は寛束ない。稲田海素……右に同じ、宮崎英修……堀も稲田も違う。加倉井だ。と、あり、現在本題については宮崎英修先生の論断が最新のものですすがその所論中、目師が郷師のことを頼むと菊田の四郎兵衛に宛てた依頼状の内容中から三宮(さばこ)のゆは磐城の湯本(いわき市)温泉であるということは判る。又「明春は常陸の湯より来臨あるべく候」と目師の弟子郷師宛の状もあり、湯本は常陸ではないし磐城三宮≡湯本。常陸の湯は三宮の湯ではなく、ひたちは常陸、それは加倉井をおいてないといっている。が然し証明根拠は漠としている。聖人の時点での「ひたちのゆ」とは『後人が一般に地誌を問題にせぬ辺からもきている』とは謂うものの漠然と常磐地方広域を指して「ひたち……」のゆと謂うのではなからうか。御報でひたちのゆと云っていても現代のようにその地点をズバリ指摘していなかったと考察するものでございます。勿論それは隠井だとの御文はどこにも見当りません。杜撰陳謝尚、波木井殿御書(弘安五年壬午十月七日)中

無辺行菩薩の再誕にてや御座すらむ。について
 日円を無辺行菩薩と賞歎するは鉄面皮にあらずや。とお述べの御仁もおられますが御報のひたちのゆへひかせ候はんと思候がもし、人にもぞとられ候はん。又そのほか云云の御文に至っては、いかにもおぞましい心性の持主が作文したとしか受けとめられず、文容からして偽作としか思えません。